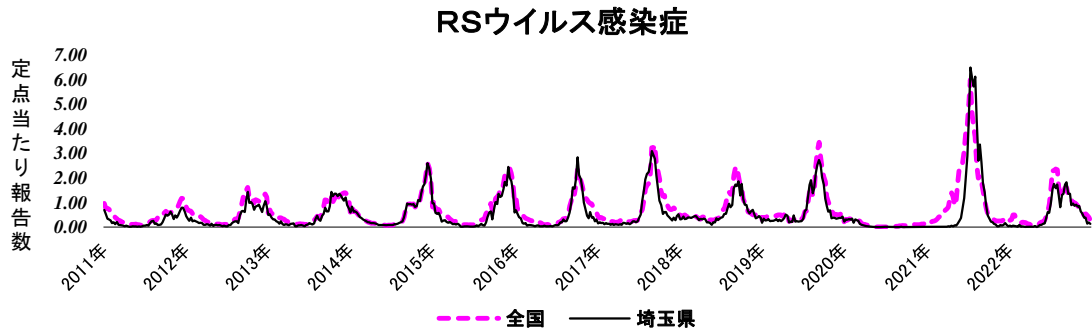


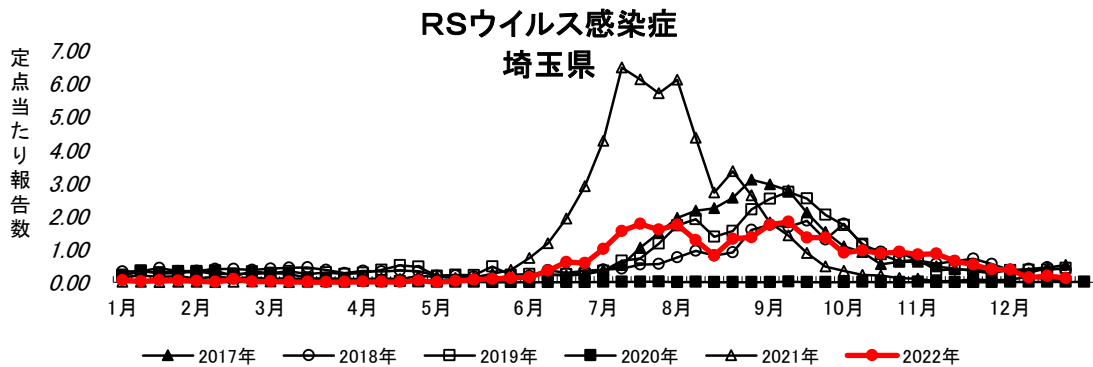
3 小児科定点把握対象疾患の動向

1) RSウイルス感染症

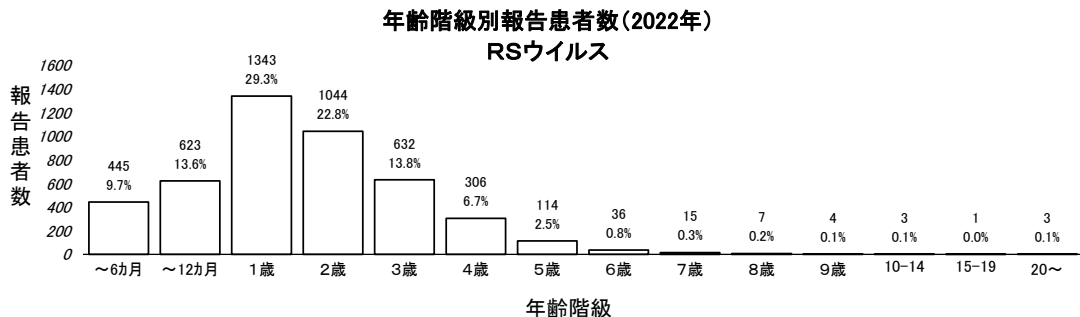
2022年第1週～52週の累積報告患者数は4,576人であった。定点当たり報告患者総数28.96は前年を下回った。定点当たり報告数は5月から増加し始め、第29週(7/18-24)に1.76、第37週(9/12-18)に1.83のピークを形成し、11月まで多い状態が続いた。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く、3歳未満が全体の75.5%を占めた。また、3歳及び4歳の割合は、前年に引き続き例年よりも多い傾向であった。



図Ⅱ-2-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：RSウイルス感染症）



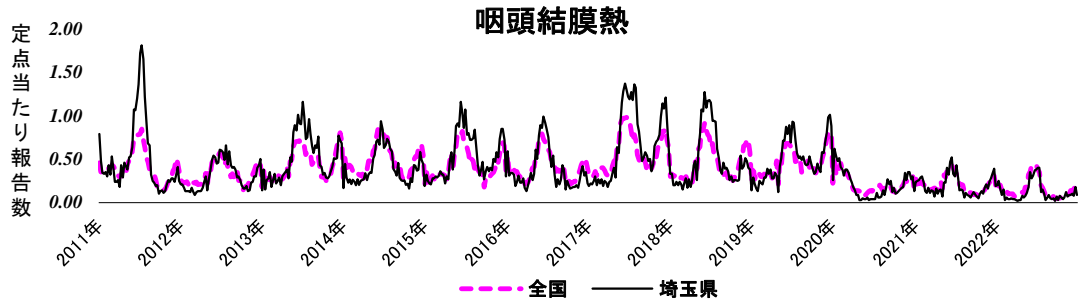
図Ⅱ-2-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：RSウイルス感染症）



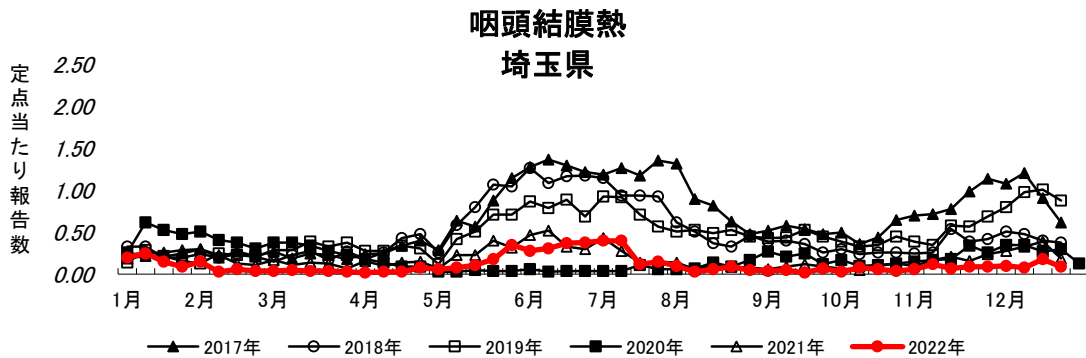
図Ⅱ-2-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：RSウイルス感染症）

2) 咽頭結膜熱

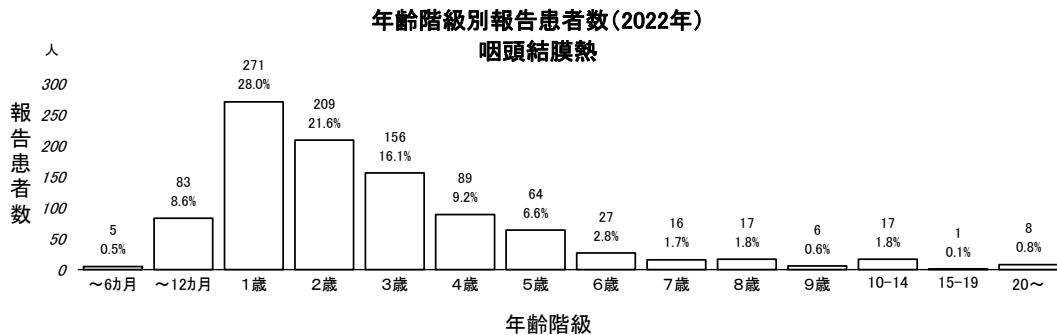
2022年第1週～52週の累積報告患者数は969人であった。定点当たり報告患者総数6.13は前年と比べ減少した。夏季流行は例年に比べ小規模で、冬季はわずかに定点当たり報告数が多い時期が1月に観察された。定点当たり報告数の最大値0.40は、第27週(7/4～10)及び第28週(7/11～17)に観察された。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く、1歳～3歳が全体の65.6%を占めた。



図Ⅱ-3-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：咽頭結膜熱）



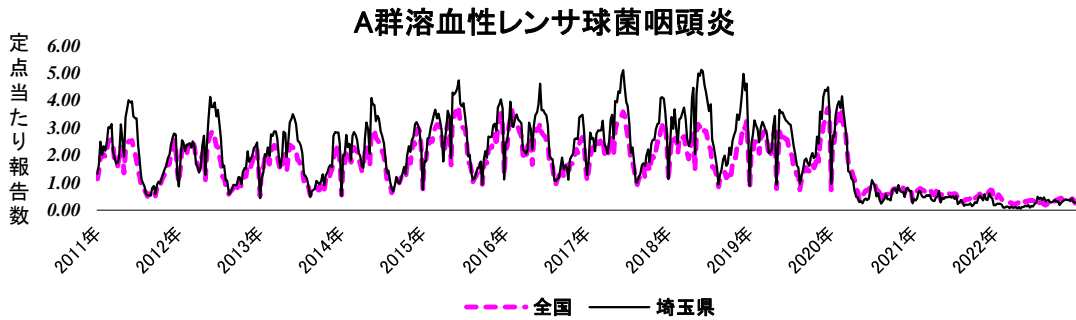
図Ⅱ-3-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：咽頭結膜熱）



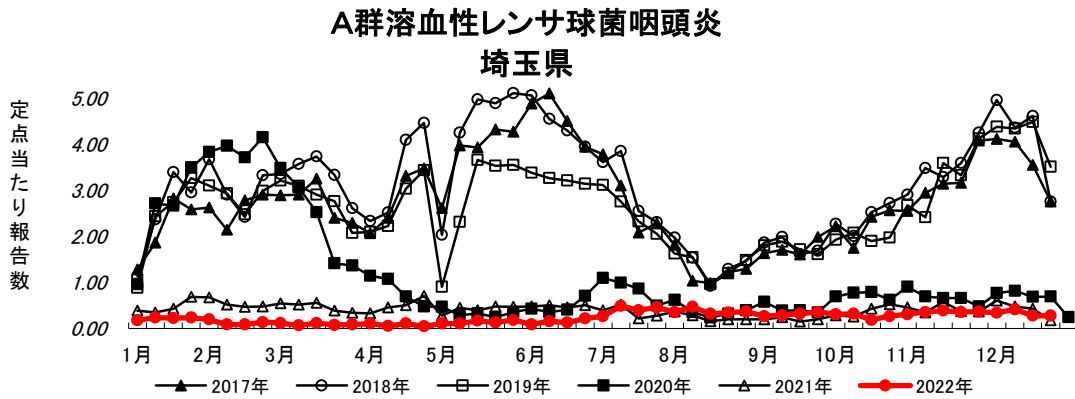
図Ⅱ-3-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：咽頭結膜熱）

3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

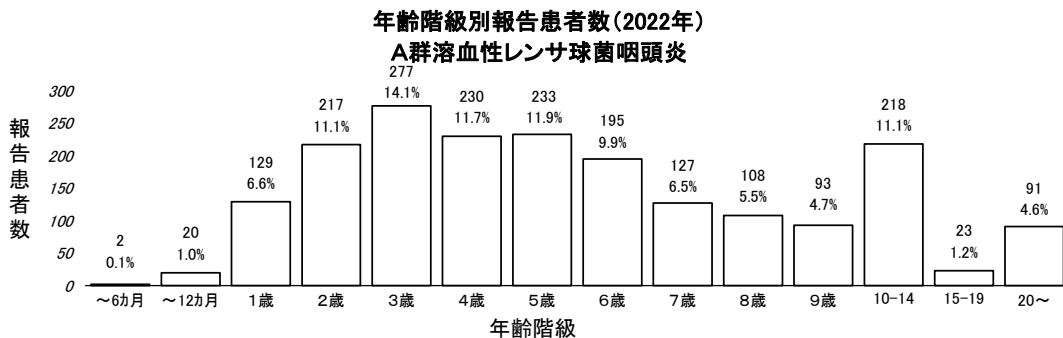
2022年第1週～52週の累積報告患者数は1,963人であった。定点当たり報告患者総数12.42は前年と比べ減少した。定点当たり報告数は、年間を通して0.50を上回ることがなく、2020年3月以降例年を下回る水準で推移している。2022年の定点当たり報告数の最大値は第28週(7/11～17)の0.49であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、3歳が最も多く、2歳～6歳が全体の58.7%を占めた。



図Ⅱ-4-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）



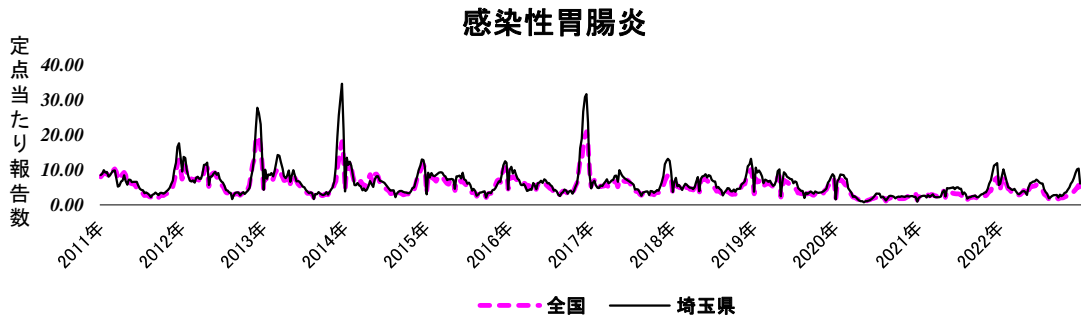
図Ⅱ-4-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）



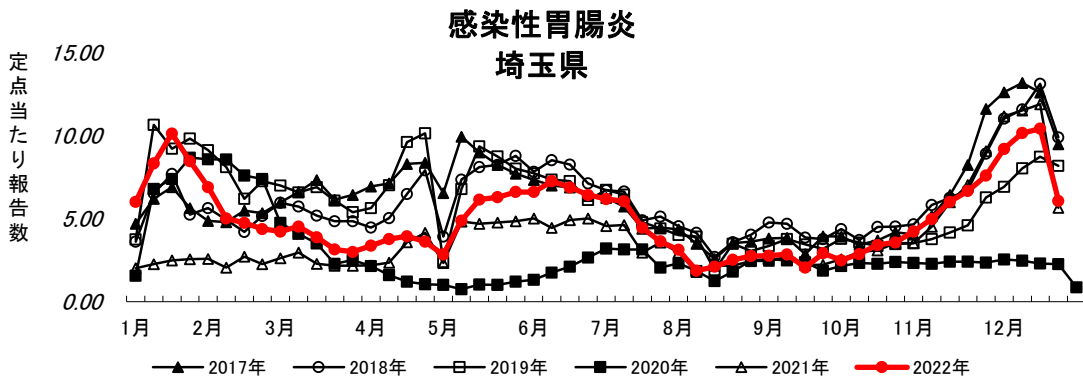
図Ⅱ-4-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）

4) 感染性胃腸炎

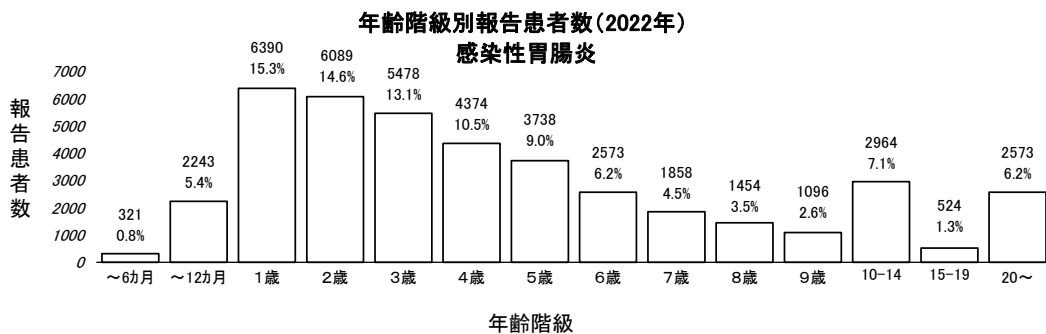
2022年第1週～52週の累積患者報告数は41,675人であった。定点当たり報告患者総数263.77は前年と比べ増加した。冬季流行は10月以降に緩やかに始まり、定点当たり報告数の最大値は第51週(12/19～25)の10.44であった。冬季以外では、5月から7月にかけて報告数がやや多い状況が続いた。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く、6歳以下が74.9%を占めた。



図Ⅱ-5-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：感染性胃腸炎）



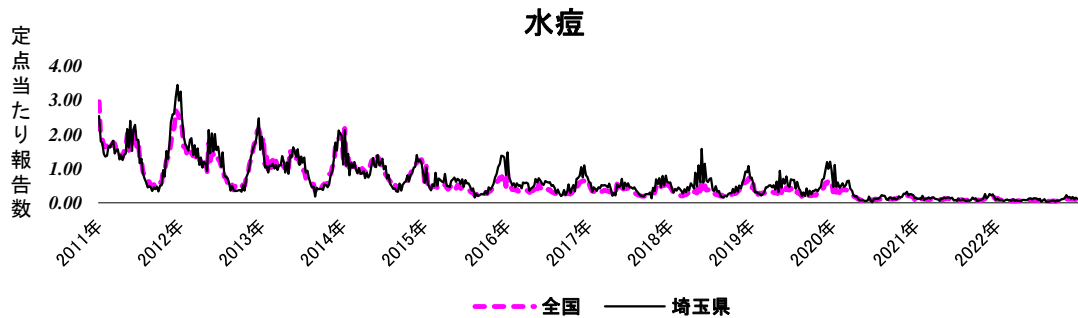
図Ⅱ-5-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：感染性胃腸炎）



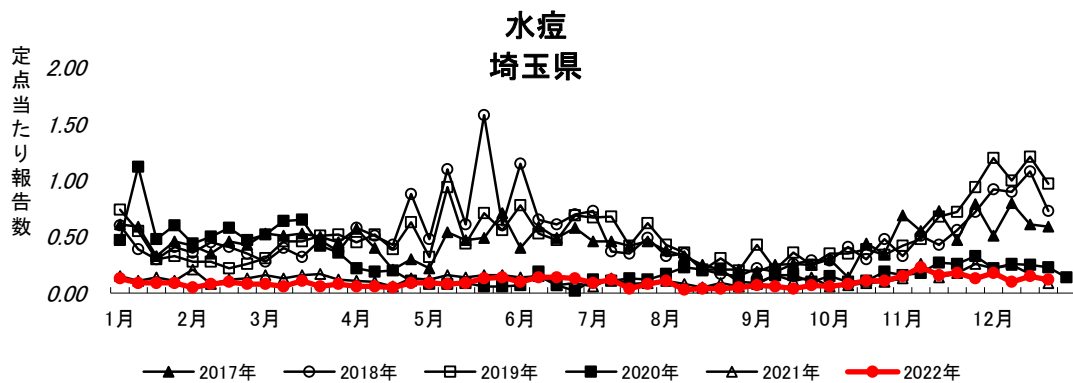
図Ⅱ-5-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：感染性胃腸炎）

5) 水痘

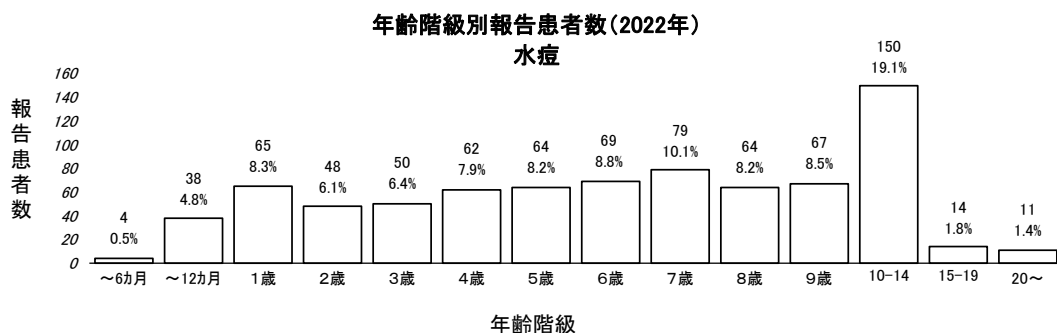
2022年第1週～第52週の累積報告患者数は785人であった。定点当たり報告患者総数4.97は前年と比べ減少した。2022年の定点当たり報告数の最大値は第45週(11/7～13)の0.23で、2020年4月以降0.50を下回る水準で推移している。年齢階級別では全ての階級で報告があり、10歳未満では、7歳が最も多かった。



図Ⅱ-6-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：水痘）



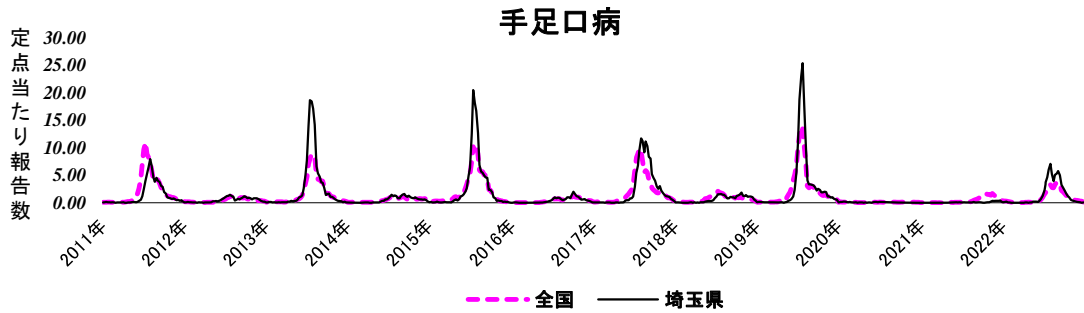
図Ⅱ-6-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：水痘）



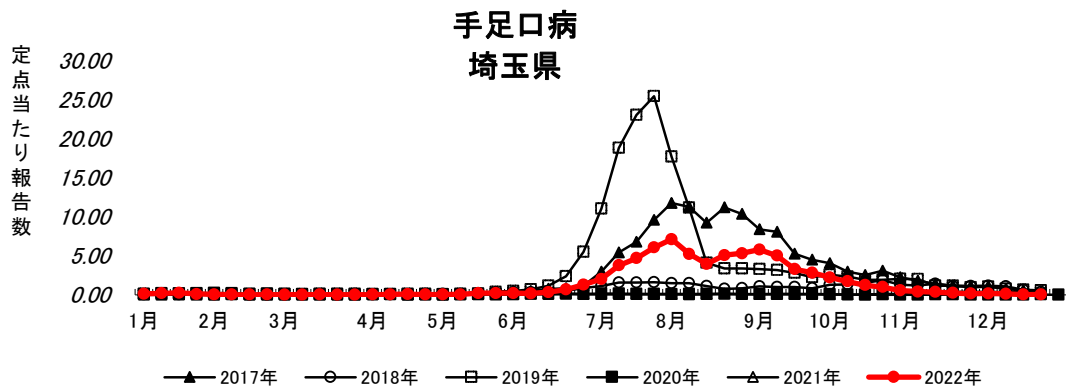
図Ⅱ-6-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：水痘）

6) 手足口病

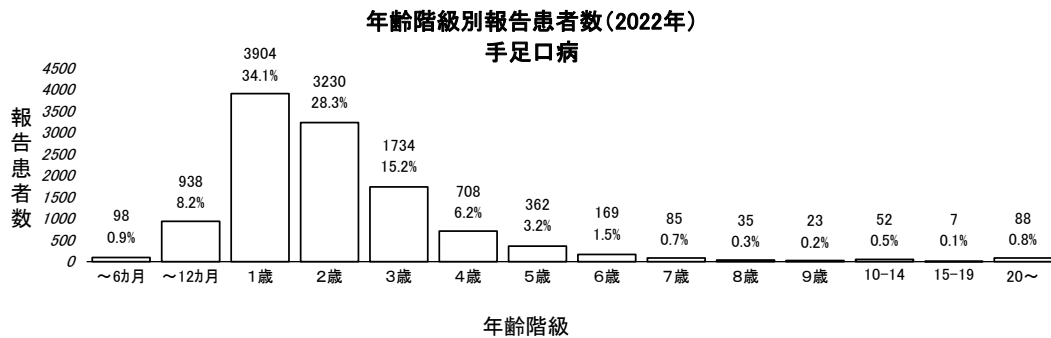
2022年第1週～52週の累積報告患者数は11,433人であった。定点当たり報告患者総数72.36は前年と比べ大きく増加した。流行は2019年以来で、第30週(7/25～31)から第40週(10/3～9)まで警報が発令された。定点当たり報告数の最大値は第31週(8/1～7)の7.10であり、過去の流行年と比較すると小規模な流行であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1歳が最も多く1歳～3歳で全体の77.6%を占めた。



図Ⅱ-7-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：手足口病）



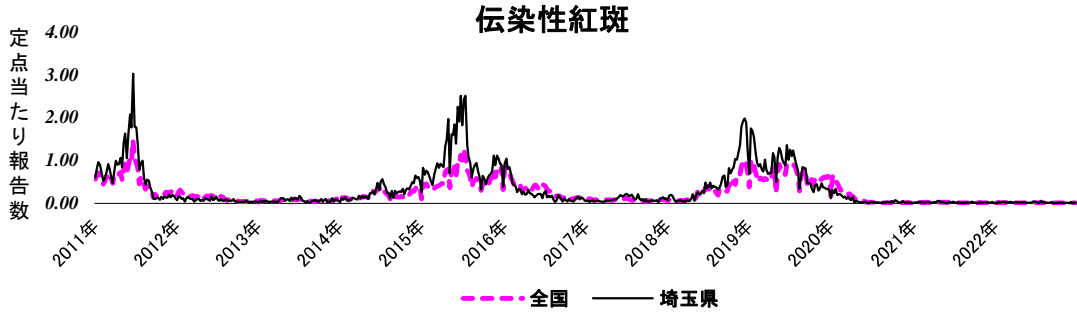
図Ⅱ-7-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：手足口病）



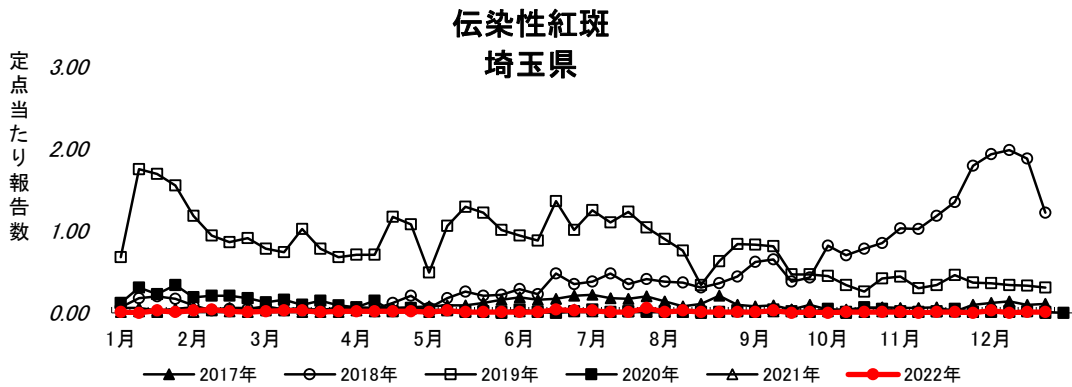
図Ⅱ-7-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：手足口病）

7) 伝染性紅斑

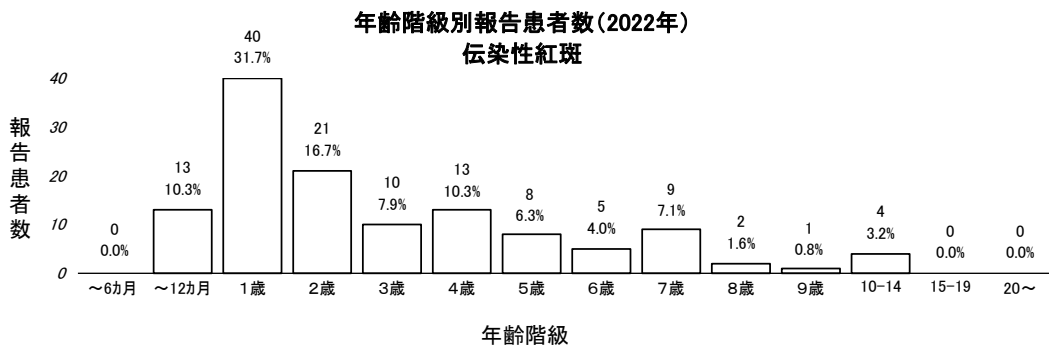
2022年第1週～52週の累積報告患者数は126人であった。定点当たり報告患者総数0.80は前年と同水準であった。定点当たり報告数の最大値は第30週(7/25～31)の0.06で、年間を通して際立った報告数の増加は観察されなかった。年齢階級別では1歳が最も多く、次いで2歳と続いた。



図Ⅱ-8-1 定点当たり報告患者数の年推移（国比較：伝染性紅斑）



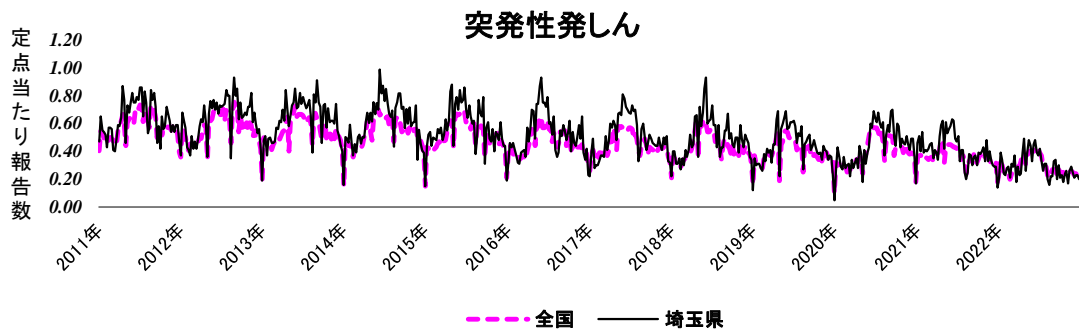
図Ⅱ-8-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：伝染性紅斑）



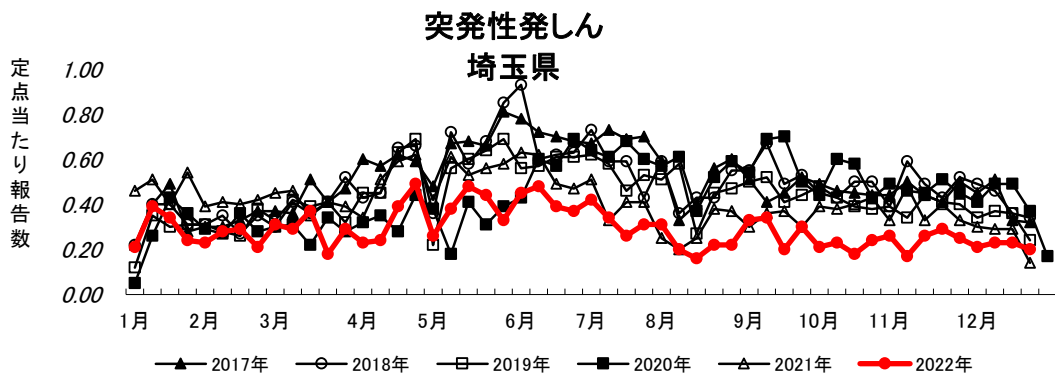
図Ⅱ-8-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：伝染性紅斑）

8) 突発性発しん

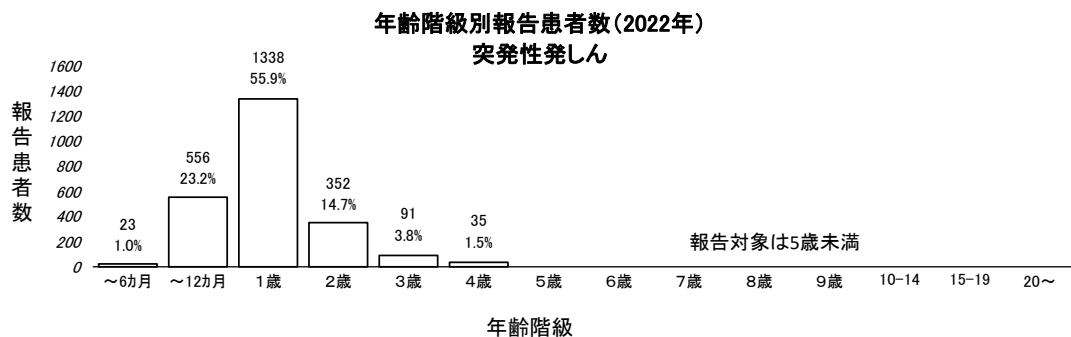
2022年第1週～52週の累積報告患者数は2,395人であった。定点当たり報告患者総数15.16は前年と比べ減少した。定点たり報告数は1月から3月は例年同様の動向が観察されたが、4月以降は例年よりやや少ない水準で推移した。定点当たり報告数の最大値は第17週(4/25～5/1)の0.49であった。年齢階級別では、例年同様に1歳が最も多く、2歳未満で全体の80.0%を占めた。



図Ⅱ-9-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：突発性発しん）



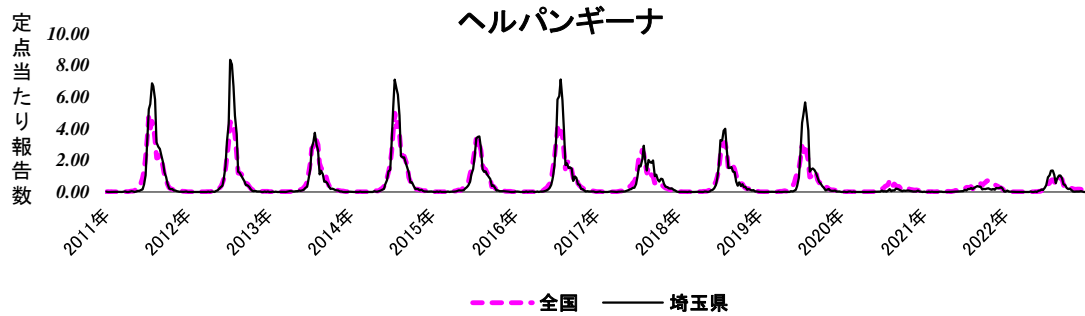
図Ⅱ-9-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：突発性発しん）



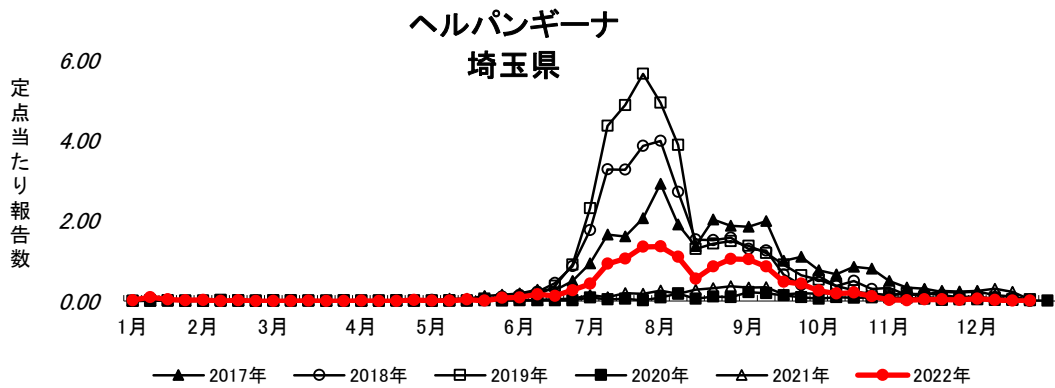
図Ⅱ-9-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：突発性発しん）

9) ヘルパンギーナ

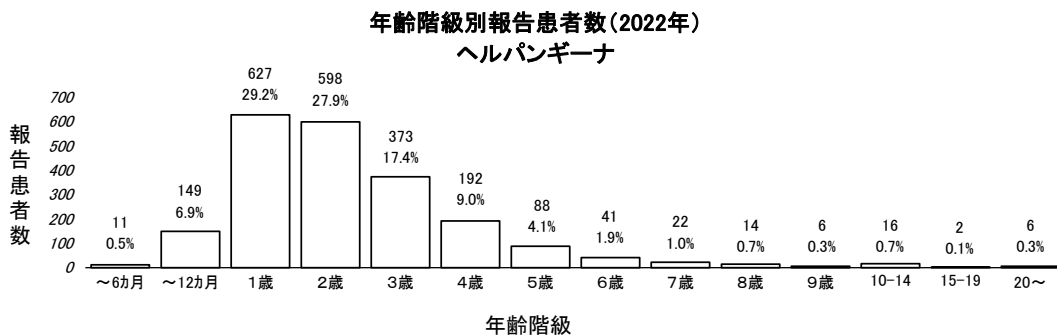
2022年第1週～52週の累積報告患者数は2,145人であった。定点当たり報告患者総数13.58は前年と比べ増加した。流行の規模は中程度の流行年であった2017年よりも小さく、小規模であった。流行は7月から9月に観察され、定点当たり報告数の最大値は第31週(8/1～8/7)の1.36であった。年齢階級別では全ての年齢階級で報告があり、1歳が最も多く1歳～3歳で全体の74.5%を占めた。



図Ⅱ-10-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：ヘルパンギーナ）



図Ⅱ-10-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：ヘルパンギーナ）



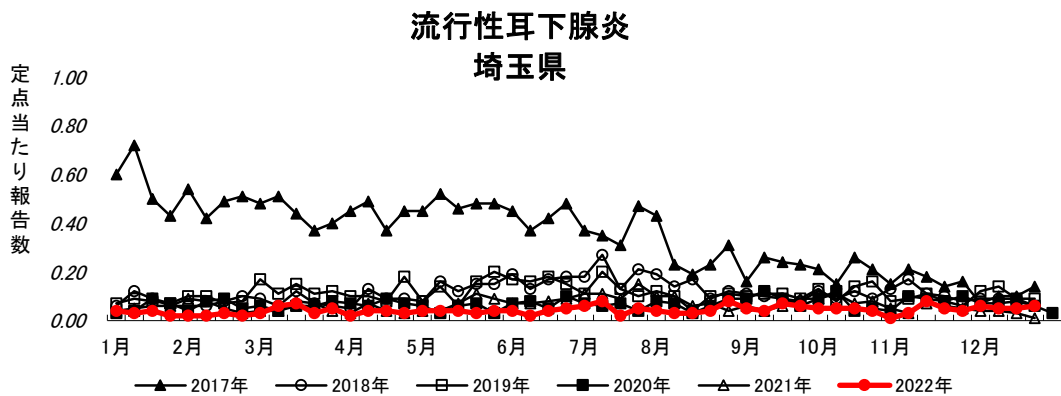
図Ⅱ-10-2 年齢階級別報告患者数（埼玉県：ヘルパンギーナ）

10) 流行性耳下腺炎

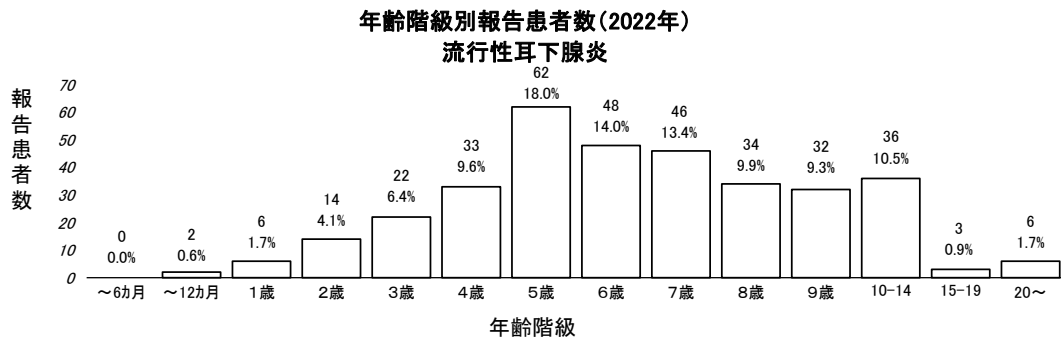
2022年第1週～52週の累積報告患者数は344人であった。定点当たり報告患者総数2.18は前年より減少した。定点当たり報告数の最大値は、第28週(7/11～17)、第35週(8/29～9/4)及び第46週(11/14～20)の0.08で、年間を通して際立った報告数の増加は観察されなかった。年齢階級別では6か月未満を除く階級で報告があり、5歳が最も多く4歳～9歳で全体の74.1%を占めた。



図Ⅱ-11-1 定点当たり報告患者数の年推移（全国比較：流行性耳下腺炎）



図Ⅱ-11-2 定点当たり報告患者数の推移（埼玉県：流行性耳下腺炎）



図Ⅱ-11-3 年齢階級別報告患者数（埼玉県：流行性耳下腺炎）